

勢太KIDS

現代の文学

の文庫

篠崎五十六



各巻挿画……「藤村文庫」
 本中挿画……「藤村文庫」
 川崎……「藤村文庫」
 加藤……「藤村文庫」
 森田……「藤村文庫」

田嶋……「藤村文庫」
 田嶋……「藤村文庫」
 田嶋……「藤村文庫」
 田嶋……「藤村文庫」
 田嶋……「藤村文庫」



藝式KIDS^{キョウ}

現代の生活
ニターノの文芸
篠崎五六 編

華々KIDS^{キッズ}

現代を生きる

【ティーンズ文学】

一九九四年一月三十日初版印刷

一九九四年二月十五日初版発行

◎

【編者】——篠崎五六

【装幀者】——谷村彰彦

【発行者】——浅川満

【発行所】——株式会社太田次郎社

東京都文京区本郷五―三―一七 一―一三

電話〇三―三八一五―〇六〇五

振替〇東京五―一三七八四五

【印字】——福田工芸株式会社へ本文〆十プロスタディオへ見出し類

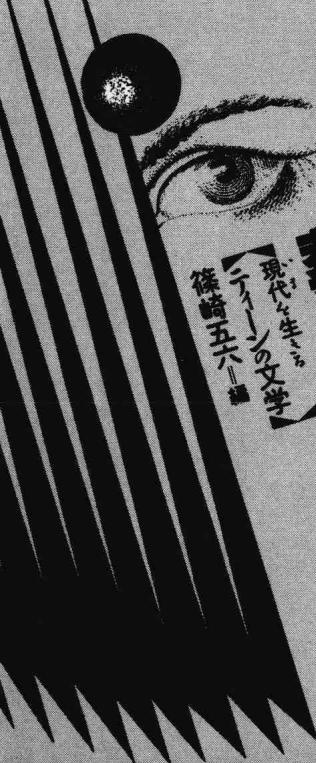
【印刷】——株式会社平河工業社へ本文〆十株式会社精興社へ装幀

【製本】——渡辺製本株式会社

【定価】——カバーに表示してあります。

ISBN4-8118-0648-4 C0093

©1994, Printed in Japan



篠崎五六〇編

現代々生々々
ニクシーノ文学

葬式KIDS

文学

【目次】

◎

葬式KIDS——牧野節子……………4

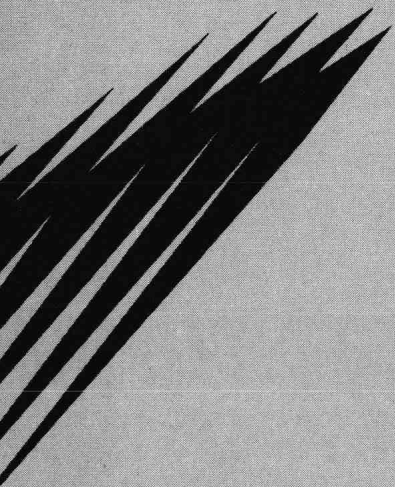
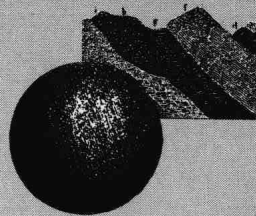
それぞれのコンサート——村中李衣……………46

もうすぐ戦争がはじまる——川島誠……………88

川から魚がわいてくる——加藤多一……………124

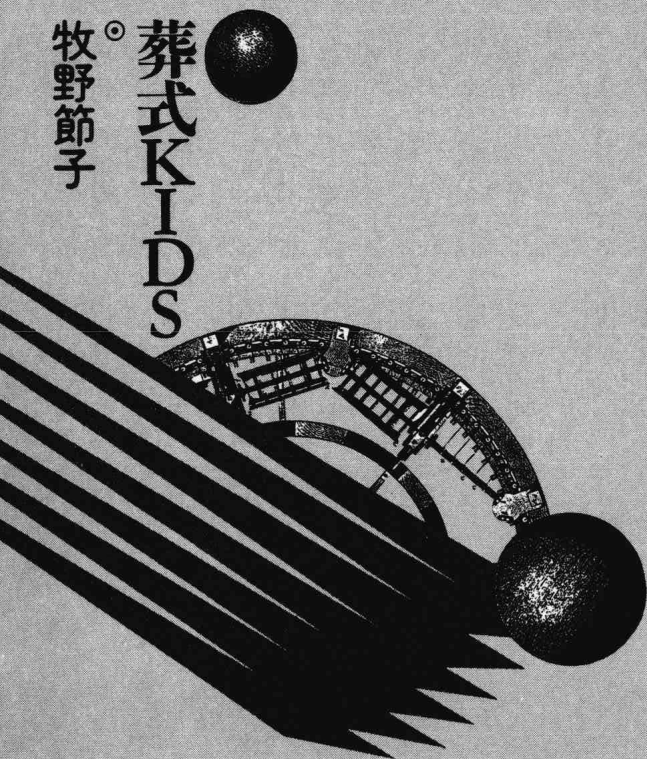
死につくす——森忠明……………162

【対談】『現代を生きる』の文学への招待
今江祥智……篠崎五六……198



牧野節子[◎]

葬式KIDS



風間サトシが死んだ。

「屈折した青春を謳いあげる、若者の代弁者」

んなコピーで呼ばれてた、ロックミュージシャン。酒に酔って、自分ちの階段ころがり落ちて、頭打って、急死。

テレビでニュースが流れたすぐあとに、案の定、光咲子^{みさこ}から電話がかかってきた。

「キーヨォ、行くでしょ、明日」「ん」

最近じゃ、光咲子のほうが、ノリノリだ。

「じゃ、ガッコーひけてから」「ああ」

光咲子と、あたしは、葬式KIDS^{キッズ}。

誰が名付けたわけじゃない。

勝手に、自分らで、そう呼んでんの。

◎

ことのはじめは、一年前。

中学一年二学期の創立記念日、平日だった。

あたしは、光咲子^{みさこ}んちで、ポテトチップスかじりながら、テレビみてた。光咲子のママはブティックづとめ。だからたいてい、うちにはいない。バツいち。超美人。光咲子もそれを受けついでる。小ボーん時から、目立ってきれい。IQは、残念ながら、あたしとおんなじ

ぐらいみたいだけどね。

午後の三時のワイドショーは、大御所の女性演歌歌手の、葬式風景で始まった。一昨日、心不全で、「あっちの世界」にいつちまったんだ。画面に映しだされる、豪華な祭壇。そのいつとう上に、たぶん十年以上前のもんじやないかと思われる、演歌歌手のニカツと笑った写真が飾られてる。祭壇にも、そのまわりにも、むせかえるような、花、花、花。

葬式の模様を、しんきくさい顔と声で伝えるレポーター。そして、門の前には、おばさんたちの行列。そのうちのひとりに、レポーターはマイクを向けた。

「あかりさんのファンの方ですね」

「ええ。残念でたまりません。せめて、せめてお焼香をあげられたらと……」

しめった涙声で言いながら顔をあげたおばさんの目は、声とは裏腹に、まるでおいしいお菓子をみつけた子どものように、輝いてる。

「今日はわざわざ秋田からやってきたんです。あかりちゃんは、私達の青春をささえてくれたスターです。だのに、こんなに、突然に……」

五十八歳の演歌歌手のこと、「ちゃん」づけしてるおばさんは、ひらひらのワンピース着て、ばっちりお化粧して、髪にはおりボンまでつけて、どっかのパーティに、これから出席するみたいな装い。

その後ろに並んでたおばさんは、すっかり喪服を着てたけど、レポーターのマイクに自分

から近づいてきて、言った。

「でも、彼女の歌は、永遠に残ります！」

力強い声は、マイクにぎぎぎん！と響いた。

そうして、喪服おばさんは、街野あかりのヒット曲「追分村から」を歌いはじめた。おりぼンのおばさんもいっしょに歌い、並んでいるおばさんたちにもそれは伝わっていき、たちまちのうちに大合唱。

レポーターは、少しとまどい気味に、でも、

「街野あかりさんにも、きつと、このファンの皆さんの歌声がきこえているにちがいありません」

うまく、しめた。

おばはんたちは、うつとりと歌い続けてる。

疲れぎみっぽいレポーターとは対照的に、肌はつやつや。目はきらきら。みてたあたしも、なんだか、わくわくしてきた。だから、あたしの横で寝っころがって、漫画読んでる光咲子に、思わず言っちゃったんだ。

「なあ、光咲子」「んー」

「葬式、行こうぜ」「えー？」

「なんかさ、おもしろそう」

かつたるそうにからだを起こした光咲子をうながし、靴を履いた。

テレビ中継されてる街野あかりの豪邸まで、電車を乗り継ぎ、一時間。

着いた時には、もう夕暮れ。おまけに小雨も降り出して。

それでも、列はえんえんと続いてた。あちこちで、街野あかりのいろんな歌が流れてた。

ラジカセ持参のおばさんもいるみたい。あたしたちは、列の一番後ろにくつついた。

前のおばさんがあたしたちを振り返り、

「あら、あかりちゃんには、こんな若いファンもいたのね」

なんていって、傘をあたしに差しかける。

「うちのドラ息子なんて、もうだめ。やかましいCDばっかかけてるわ。パンだかタイヤだ

か知らないけど」

?.....あ、パンクのことか。けけっ。

「ねえねえ、あかりちゃんの歌、なんか歌ってみて」

あたしは、ちよいあせる。あかりの曲なんて……。でも、すかさず光咲子が歌い出す。

——ひとりぐらしの連れ合いは……

「涙ぐらし」だ。

——鏡のなかの、左利きのわたし……

この大ヒット曲なら、あたしもなんとか歌える。街野あかりが、たしか三年ぐらい前に、

出したエイト・ビートのノリの歌。だけど歌詞は、やっぱド演歌。

——飲み干した盃に、落とす涙……

声をそろえてワン・コーラス歌い終わったところで、

「まあ、嬉しい。おばさん、おこづかい、あげちゃうわっ！ ほらほら」

おばさんは、ワニ革のハンドバッグから、バッグとおんなじワニ革の財布を（たぶん、セツトで買ったんだ。テレビショッピングなんかで）パチンとあげ、千円札を取り出して、あたしと光咲子に二枚ずつにぎらせた。それが、このおばさんにとって、「おおばんぶるまい」だったのか「けちな出費」だったのかは、わかんない。だけどまあ、とにかくあたしたちは、街野あかりが死んだおかげで、うちの最寄りの駅の前の珈琲屋「らばん・あじる」のケーキ・セットを三回食えるぐらいのこづかいは、せしめた、というわけ。

そんで、お焼香の順番がまわってきた時、まわりの雰囲気のにせられて、フアンでもなんでもないのに、涙出てきたりしちやって。それが、なんだか気持ちよかったりして。

帰る時。豪邸の中から門の外までにあふれ出ている、おくられた花、花、花を「ご自由にとりください」ってアナウンスがあった。

おばはんたちと競うように、あたしたちはごっそり花を抜き取った。大ぶりの百合の花の束を抱えて、あたしは帰りの電車に乗った。光咲子がつったのは菊が多くて、

「まずつつちやったかなあ。いかにも葬式みたいだもんね」

なんて、こぼしてたけど、その声ははずんでた。

あたしは家に帰ると、洗面所の隅ではこりかぶっている花瓶を、洗った。

何年間、この花瓶は使われてないんだろ。家に花が飾ってあった記憶なんて、ない。

白い花弁を上に向けると、つん、と、きつい香りが、あたしの鼻を刺した。黄色い花粉が、

あたしの黒のトレーナーの袖についた。

母親が洗面所脇のトイレから出てきた。ジャージー・パンツのゴム・ウエストのところをず

ずすと、たくしあげながら。

「これ、きれいだろ」

あたしのさしだした花を、母親はろくにみもせず、

「はやく、食べな」

と、食卓のほうをあごでしゃくった。あいもかわらずの、冷凍食品を解凍しただけのような

めし。注ぎ口のところに、かすのこびりついた醤油びん。茶しぶのいっぱいついたきゆうす。

輪じみのついたテーブルクロス。

あたしは、百合を居間に飾ろうかと思ってたけど、考え直し、自分の部屋に持っていく。

部屋の戸をがたと閉める。

街野あかりより、ずっと年下のはずなのに。葬式に集まってたおばはんたちよりも、若いはずなのに。あたしの母親は、醜い。ぶよぶよ、ぶたばばあ。光咲子のママとは大違い。

全自動におまかせの洗濯。手抜きめし。スーパーのパートのレジ。それ以外は、なんもできない。

あんな母親と、そこから、やせたねずみたく貧相な父親が、SEXして生まれたのが、このあたしだと思うと、いつも吐き気がする。

「かたづかないから、早く食べなっ！」

あたしは戸の向こうの怒鳴り声を無視して、百合の花に顔をうずめた。

◎

……あれから、一年間。

百合の花が、いつも手に入るわけじゃなかったけど、二千円に味をしめたからじゃないけど、あん時の高揚感が忘れらんなくて。

誰か有名人が死んだっていうと、あたしたちは、そのファンのふりして、お通夜や葬式に出かけてった。

ユーメージンは、いい。あんなにゴージャスなお葬式をしてもらって。あんなにたくさん、ひとが集まって……そう、葬式にくる芸能人、けっこう、いっぱい、みれる。時が時だけに、サインねだったりできないけど。そのかし、時が時だけに、近づいていっても、あんなに邪険に追い払われるってこともない。あたしたちは、そのひとの前の前にたむろするばかりじゃなく、親戚みたいな顔して、うまくもぐりこめるようになつた。弔辞におおげさに

泣いてみせたり、遺影の前で、神妙な顔して手え合わせたり、厳肅さの裏にふくれあがってるはしやぎ気分を、楽しんでいた。

死んだやつは、いい。そこで、終わり。だから、もう、傷つかない。もう、傷つけない。出かけてった葬式の翌日には、学校行く前に、必ず、ワイドショーをビデオ・セットしく。そうすると、あとでみた時、画面に自分らが映ってたりすることもあった。

たまーにだけど、クラスで、風邪で休んだやつなんかで、

「昨日、朝のワイドショーみてたら、おまえら映ってたんで、驚いた」
なんていうのもいたりして。

光咲子とあたしの「葬式KIDS」ぶりは、学年でも、知ってるやつは知ってるって感じで、センコーの耳にも入ってたみたいだけど、別に注意もされなかった。

あたしや光咲子みたく、受験ウォーズにノリ切れないキャラクターの約何人かは、センコーには、シカト状態されてっから。もち、こっちも、シカトしてんだだけだな。

「昨日、映ってたじゃん」

たまーにでも、そう言われんのは、けっこう気持ちいい。その程度の、楽しみ。

その程度の……だけど、その程度のもんっていうのも、あたしたちのまわりには、なんもないから、それは、だんだん、大事な楽しみに、なってたのかも、しんない。

◎

風間サトシの家は、世田谷。電車一本で行ける。駅前で、光咲子と待ち合わせる。

駅の手前、角のパチンコ屋を、あたしは通りすがりざまに横目でのぞく。ガラス越しに透けてみえる、いつもの、角の、席。

また、いる。オレンジ色の、髪。

ギラン。レッド・シューズのボーカルだ。

いっつもパチンコばかりしてる。

仕事、ねーのかよ。

今日は、ひとり、だけど。時々女がいるの、隣に。イケイケ風のケバイやつ。女はパチンコするっていうよか、ギランのしてるところをみてたりすんの。でも、つまんなさそうに。

人気絶頂で亡くなるロッカーもいれば、売れねーで、パチンコやってるやつもいる。

どっちがカッコイイかって？ そりゃ、サトシに決まってる。

駅前で待ってた光咲子は、どピンクのミニスカートにどピンクのブルゾン。

「今日はロッカーの葬式だからね。派手目にキメてみたよー」

光咲子はいい。スリムなからだに甘い声。淡いピンクに輝く頬。綿菓子みたいな女の子。

「キーヨ、その黒のスパッツいいじゃん」

「細くみえるかよ」「みえる、みえるう！」